

也。栗色に塗之、煮黒之金具也。裏に朱染に而柴屋之二字書之。端に黒漆に而、政右自詠いや高きの歌二行七字に書之。尤殊勝之物也。可便工速摸之者也。と見えたり。能順聯玉集に、

淺井政右獨吟千句追加に

咲きにけりおもひし物の初櫻

政右の身まかり給ふ悼に

玉よばふこたへもあらじ袖の露

また政右の悼

馴れし世や恨みにかへる老の秋

關屋政春の古兵談に、二代源右衛門政右は連歌の上手なりといへり。

○稻葉宇右衛門舊邸

享保録に、熊谷忠右衛門家は、稻葉左近の甥稻葉宇右衛門と云ふ者の家を、忠右衛門が祖父又八拜領し、今以て其の家作の儘なりといへり。今按ずるに、熊谷忠右衛門は初め伴六郎と云ひ、元祿六年の土帳に、熊谷伴六郎居宅加藤十左衛門南隣也。と見え、享保九年の土帳には、加藤重左衛

門は、前田近江守近所。とあり。

○稻葉宇右衛門傳

宇右衛門は左近の弟也。享保録に、甥とするは非也。懷惠夜話に云ふ。稻葉左近の弟宇右衛門は、被召出て五百石被下置。大筒打にて、強勢至極の者也。常々頭痛を痛みけり。外科醫に尋ねければ、鉢の内に腐肉あり、割りて去らば可治と云ふ。則療治を頼む。鉢巻をせよといふに不同心。既に刀を以て割り、腐肉を去り藥を付け、るに、顔色自若として常に變らず。終に痼疾を除くと也。左近居屋敷に取籠りける時、一所に取籠り、塀に大筒を仕懸け、鐵炮藥を土藏に詰め、是に火を懸けて可相働支度すと。三壺記に、寛永十八年七月上旬稻葉左近切腹被仰付、弟宇右衛門も被仰付、前後に切腹いたしけり。とあり。

○有賀縫殿助舊邸

前田氏の横、長町へ下る南側の角家也。延寶金澤圖に、有賀甚六と見え、元祿六年の土帳に、有賀甚六郎前田備後横手敷近所。とありて、數代居住せしが、明治廢藩の際退去せり。

○有賀有賀齋傳

有賀齋は有賀氏の始祖なり。子孫直昌の墓碑記に云ふ。姓秦。氏有賀。其先八世祖諱直政、初隸朝倉義景麾下。娶武田氏典厩之女。生二男三女。其長男秦六。常從義景之軍。有汗馬之勞。嘗能美郡寺井之戰獲首級。義景大嘉獎。給感狀一通。以旌其功。後直政自越來賀。奉仕高德亞相公。賜祿四千石。及老致仕。自號有賀齋。公乃命秦六。襲其祿。直政慶長八年七月三日病卒。遂以其號諡焉。至後有故祿秩除。廼有賀氏絕祀。數年後。又秦六之同母弟長治。稱左京者。更賜祿七百石。爲越之高岡之宰。於是賀氏復得奉祀。乃七世祖是也云々。今家傳朝倉氏の感狀寫如左。去卯月十八日、於加賀國能美郡寺井口合戰之時、首一討捕之。忠節神妙、彌可抽軍功者也。

八月十五日

判

有賀秦六どのへ

天正十八年六月關東北條氏被攻候節、瑞龍公より有賀齋に被下御書寫。

返々てがらすいりやうのほかに候。其方のしん六につけ

おき候もの共、いづれもくびをとり申候。てがらどもに候。われくものも、半分ておひし人候。

わざと申入候。昨日廿三日八わうじと申しろへとりかけ、本丸までせめほし、くびかす三千よとらせ候。くわんとうにてのがら、すいりやうのほかに候。のちくもきおよばれ候はん間、早々し。

廿四日

孫 四

有賀甚六
ゆう 加 參

右眞筆の親簡、延寶六年四月六日綱紀卿へ入一覽處、被留置之旨被仰出、寫而已家藏す。有賀氏三世宗俊加恩八百石、賜千五百石。四世政寬遺知千石賜はり、後加恩六百石、都合千六百石を世々家祿とす。

○高岡町藪之内

舊藩中惣構堀の土居高く、雜木竹藪生茂りしが、土居の内は往來なりし故、その内通りをば藪内と呼べり。三壺記に、寛永八年四月金澤火災の時、物構の外藪内長九郎左衛門・山崎長門家云々。とあり。明治廢藩の後、物構堀をば悉く廢し、堀跡のみと成る。然れども高岡町の後、地は、高岡町